

キミが大学で学ぶことの人類にとっての意味

というわけで、全国のごく少数の幸福な大学新入生、高校生、ひよつとしてちよつと背伸びをした中学生諸君。そして、私同様「教養とは何か」という問いにからめとられてきた、もつと少数の大人のみなさん。いよいよ本編の始まりだ！ 教養部の墓場から蘇ったゾンビ教師として、恥も外聞も棚上げにして突っ走り、おまいらを啓蒙しまくってやるぜ。はじめっからフルスロットルで飛ばしまくるからな。振り落とされてるんじゃないぞ。

……とヤンキー教師風でキメてみました。「ごく少数の幸福な」は、スタンダールの『パルムの僧院』に見つけて以来、いつか使ってみたいもんだと温めてきたフレーズだ。スタンダールはこの作品を「ごく少数の幸福な人に (To the happy few)」捧げている。読んでくれる人も理解してくれる人もそんなにいないだろう、でも、オレの本に出会った人、さらにそれを読んで理解できる人は、まさにそのことよってすでに幸せな人だ、という自負が込められてい

る。めちゃくちゃ上から目線でカッコイイでしょ。使いたくなるよね。で、使ってみました。いま、とっても満足。

キミは何のために学ぶのか

2016年まで、私は「人類生存のための科学」という科目を受け持っていた。すごい名前でしょ。名称のインパクトだけで開講することになってしまった科目だ。1年生の1学期向け、私の学部では必修科目。ということ、入学はしたものの、大学で学ぶとはどういうことかさっぱりわかったらんでコマルわという新人生に、いっちょよそのところからはつきりさせてやろうじゃないの、という趣旨の授業である。実を言えば、本書の元ネタはこの科目の講義ノートなのだ。

この授業の初回に、「キミが大学で学ぶことの意味」は何かを考えてもらうことにしていた。ただし、この問いはいくつかのレベルで問うことができる。まずは、キミが大学で学ぶことのキミにとっての意味。これはもう人さまざま。医師とか弁護士とか薬剤師とか。こういう職に就きたくて大学に行く人もいるだろう。あるいは、抑圧的な親から逃れるため、都会に出たいから、たんに周りのみんなが行くからなんとなく。どの動機が立派ということはない。

ただ、言っておきたいことがある。大学で学ぶことのキミにとっての意味をあらかじめ選んで決めておくことはできないということだ。大学での学びがキミにとって意味あるものになるかどうかは、キミがどういう人か、大学でどう過ごすか、誰にたまたま出会うか、大学を出た

後の世の中がどうなるかによって変わってしまう。それどころか、大学で学ぶことによってキミにとっての「意味あること」の尺度そのものが変化してしまうかもしれない。

だから、一般論はほとんど役立たない。たしかに大学卒の生涯平均年収は高校卒のそれより高いというデータがある。一方で、奨学金を借りて借金まみれで社会人生活を始めるのは、かえって損だという声もある。どちらが正しいにせよ、キミがお金に換えることのできない価値あるものを大学で得る可能性は計算に入っていない。リッチじゃないけど、1日の仕事が終わって量子力学をコツコツ勉強するのが無上の楽しみ、という人生になるかもしれないじゃない。じっさいそういう人はたくさんいる。大学は出会いの場だ。生涯の友や人生の伴侶（しかも同じことを学んだ仲間）に出会うかもしれない。だから私に言えるのは、無理してまで大学に行く必要はないかもしれないけれど、その余裕があるならぜひ行きたまえ、ということだ。無責任でごめんね。

次に、キミが大学で学ぶことの**国家**にとっての意味。これは実にストリート。安価で良質な労働力を生み出すこと。大学によってはこれに、イノベーションをバンバン生み出す人材を生産することがつけ加わる。こういう人たちが一定数いないと、国力は低下しちゃうからね。だから、大学には多額の税金がつき込まれているし、就職率と就職先が大学評価の指標になる。大学教育の「受益者」はキミじゃない。お国なのだ。でも、こういつたくだらんことは文科省のお役人にも考えさせておけばよいことだ。キミたちの貴重な頭脳を使うことはない。

考えてもraitたいのは、キミが大学で学ぶことの人類にとっての意味だ。どう？ これは考

えたことがなかったでしよ。この問いを考えるためには、人類ってどんな生きものなのかということにまで遡って考え直さないといけない。生物の種としてみた場合、ヒトはとても変わっている。哺乳類でもかなり大型の部類に属するのだが、それにしてみれば一匹をとってくるとなんだか頼りない。鋭い牙も爪もない。皮膚は薄くて弱い。なのにこんなに繁栄している（他の種の存続を脅かすほどに）。このユニークな性質はどこからきたのだろう。

ヒトと猿はどう違う？

遺伝子か？ 答えはイエスカつノーだ。現存する生きもののうち、ヒトにもっとも近いのはチンパンジーである。両者はおよそ500万〜600万年前に共通祖先から分かれたとされている。地球の歴史ではつい最近だ。なので、遺伝子レベルではヒトとチンパンジーの違いはわずか1・23%にすぎない^①。

しかし、一方でヒトとチンパンジーは**ずいぶん違う**。チンパンジーはたしかに賢いが、科学技術はもてなかった。松沢哲郎先生はアイちゃんを研究しているが、アイちゃんは松沢先生を研究して論文を書いたりはしない^②。チンパンジーの群れには会社も学校もない。だから、受験や就職で頭を悩ませる若きチンパンジーなんて存在しない。遺伝的にはほとんど違わないのに、この差はどこからやってきたのだろう。

キミは言うかもしれない。答えは簡単、**ヒトは「文化」をもっているから**。しかし、ここでヤバイのは、自然と文化といった二分法にハマることだ。で、前者は理科系の領分、後者をや

るのが文系って考えてしまうとさらにヤバイ。そうすると、「所詮は進化の産物だよね」という人間観と、「にもかかわらずヒトってそれを超えたところがあるよね」という人間観を統一するものの方は見方はいつまでたつても手に入らない。

ヒトと「賢い動物」の違いの第一近似として、文化のあるなしに訴えるのはとりあえず認めるとして、その文化を「自然と文化」という二分法にハマらずに捉えるにはどうしたらよいだろう。**鍵になるのは「情報」という概念だ。**前の世代から次の世代に、生存に必要な情報を伝えるしくみとして遺伝を捉えてみよう。最も基本的なものは体のつくりについての情報だ。これがちゃんと伝わらないと次世代は死んじやう。

ヒト以外の生きものは世代から世代へと情報を伝えるチャンネルをほぼ遺伝だけに依存している。彼らは親から子どもに生存に必要な情報を伝えるときに、遺伝子で伝える、というやり方しかできない。しかし、ヒトという種はどういうわけだか、世代間情報伝達のために、遺伝以外のチャンネルを発展させてきた。

そのチャンネルが「文化」とか「教育」と呼ばれるものだ。われわれの生存が文化に大きく依存していることを理解するのはたやすい。たとえば、医療や効率的食料生産やその輸送といった科学技術の成果なしに、キミが今日まで生き延びてこられたらどうかと考えてみればよい。

もちろん、文化と教育（学習）を介した世代間情報伝達はヒトの専売特許ではない。よく知られた例をあげよう。ニホンザルの「芋洗い」だ。1953年に宮崎県の幸島（うしじま）で、一頭のメスザルが芋についた砂を海水で洗うことを覚えた。そうすると塩味がついて美味しい。この習



幸島のニホンザル (photo©時事通信)

慣は模倣学習によって瞬く間に鳥じゅうのサルに広まった。文科省ならこのメスザルをイノベーション人材と呼ぶところだ。あ、「猿材」か。残念なことに彼女には「イモ」というダサイ名前がつけられてしまったわけだが。

というわけで、ヒト以外の動物にも文化とその伝達めいたものは見られる。けれども、ヒトはそのチャンネルをどんどん太くして、それに生存を頼りきってしまった。一匹では弱い、つまり遺伝というチャンネルで受け継いだものは貧弱だが、もう一つのチャンネルから得ることのできる生存のための情報がやたらと豊かだ。だからこんなに栄えている。これがヒトのユニークなところだ⁽³⁾。

書き言葉が思考を強化する

こんな風に文化と教育・学習を通じた世代間情報伝達のチャンネルがとてつもなく太くなったのは、ヒトが言語を発明したおかげだ。これが、わずか1・23%の違いを大きな違いにまで拡大したのかもしれない。注目されているのは、ヒトの第7染色体上にあるFOXP2という遺伝子だ⁽⁴⁾。ヒトのFOXP2はチンパンジーのとちよつとだけ違う(二つのアミノ酸ぶん)。このわずかな違い

が、ヒトの言語の進化をスタートさせたと考える研究者もいる。

しかし、決定的なのは書き言葉の発明じゃないだろうか。われわれの「思い」はすぐに移ろって消えてしまうが、文字は半永久的に残る。だから、思考を頭の外に出して文字に記しておくことによつて、頭の中からは消えてしまつても、考えたことを残しておくことができる。このようにして、書き言葉は人類の**長期記憶**をとつとも増強してくれた。世代を超えて伝えるべき情報を、頭の外に出しておくことで、いくらでもたくさん情報を次世代に伝達できるようになつたわけだ。こりゃチャネルも太くなるわね。

書き言葉の役割は、考えたことをそのままとっておくだけではない。ある意味でヒトの**思考そのものを改善する**。つまり、もつと上手に考えられるようにしてくれる。筆算を思い浮かべてほしい。キミは365×3600を頭の中だけで暗算できるだろうか。少なくとも私にはできない。でも、紙とペンがあればこの計算は小学生にもできる。頭に入れておくのは九九と足し算の規則だけでよい。そうすると、脳と手と紙とペンからなるシステムは、脳だけよりはるかに複雑なことを考えられる。

書き言葉の役割はもう一つある。**批判的思考を可能にする**ということだ。SF作家のグレッグ・イーガンは、『TAP』（山岸真訳、河出文庫）という作品の中でこのことをうまく表現してくれている。

「もし、本をひらくたびに、書いた人の言っていることをなにもかも鵜呑みにしなくちゃ

ならないとしたら、どう思う？ 文の途中で読むのをやめて、「これは……でたらめだ」
って思えないとしたら。一語一語を自分の頭の中で論証する能力がなくなっちゃったら」

「そんなのはごめんだわ」

「それがVRの未来なんだよ」

「VR」はバーチャル・リアリティのこと。本の場合、途中で読むのをやめても、文字はそこにそのまま残っている。これをうまく利用して、「これって、さっき書いてたことと矛盾してないか？」とか「どうしてこの結論が出てくるわけ？」と考え、吟味しながら読むことができる。つまり、批判的に読むことができる。これに対して、バーチャル・リアリティはまさに擬似「体験」なので、情報は次から次へと押し寄せてきては消えていく。そのため、その都度の情報を処理するのに追われて、「ゆっくり考えながら」と「振り返りながら」ができない。TAPというのは、バーチャル・リアリティについても批判的思考を可能にする、思考強化装置のことだ（なんせSFですから、そういうのがある）。

言語というと、すぐに「コミュニケーションの道具でしょ」と短絡する傾向がある。しかし、コミュニケーションなら動物もやっている。ベルベットモンキーは、ヒヨウ、ヘビ、ワシを見つけると、それぞれに対して異なる叫び声をあげ、それを聞いた個体は叫びの違いに応じて異なった逃げ方をする。ミツパチはダンスによって、蜜のありかを仲間伝える。賢いね。よく英語教育について、読み書きはいいからコミュニケーション重視でいきましょう、って言われ

るけど、動物にもできることに力を入れてどうするんだろ。むしろ、人間の言語を動物の言語から区別し際立たせているのは、書くことと読むことなのに。

よき概念はヒトの幸福な生存に欠かせない

次に、文化・教育チャンネルで伝わる「生存に大切なもの」とは何かをよく見てみよう。キミの生存を支えてくれている文化的遺産は、さっきも述べたように、まず第一に科学や技術の産物だろう。しかしそれだけとは限らない。概念や理念といった抽象的なものも同じくらい重要だ。

たとえば、「人権」という概念を考えてみよう。キミは自分の人生にそれほど理不尽なことは起こらないはずだと思つて暮らしているだろう。たとえば、理由もないのに牢獄に閉じ込められるとか、勝手に臓器を抜きとられて売り飛ばされるとか、自分の家の周りで「日本から出て行け」と連呼されるとか。こういうことは起きそうにないと思うだろう。そして、もし万が一そのような目に遭わされたら、裁判にでもなんでも訴えて戦うことができると思つている。何よりも、「自分はそんな目に遭ういわれはない」と思うことができる。これらはすべて、「人権」という概念があるからだ。そして、キミがその概念を知っているからだ。この概念はキミの幸せな生存を可能にしてくれている。

しかし、人類は最初からこの概念をもっていたわけではない。ということとは、歴史の中で、誰かがこの概念を発明してくれたわけだ。具体的には、ジョン・ロックとかジャン・ジャッ

ク・ルソーとかに代表される幾人もの思想家たちが、苦勞してこの概念を生み出し、それを洗練させて鍛え上げてくれた。でも、それだけでは人権概念とキミの生存とは結びつかない。17世紀ヨーロッパと21世紀日本との間に、無数の人々がいる。これらの人たちが、この新たに発明された概念は「なかなかいいじゃん」と思い、それを教育や文化という伝達装置を通して次の世代にバトンタッチしてくれたからこそ、人権概念はキミの手許に届いている。

そのリレー走者の一人として、明治期の民権思想家の植木枝盛えもりを紹介しよう。彼の『民権自由論』（岩波文庫、読点を補った）の冒頭はこんな風だ。

一寸御免を蒙りまして日本の御百姓様、日本の御商人様、日本の御細工人職人様、そのほか士族様、御医者様、船頭様、馬かた様、獵師様、飴売様、お乳母様、新平民様共御一統いっとうに申し上げます。さてあなた方は皆々御同様に一つの大きな宝をお持ちでござる。この大きな宝とは何んでござるか。打出うちでの小槌づちか銭ぜにのなる樹か、金か銀か珊瑚か。だいやもんどか。ただしは別品べつびんの女房をいうか。才智ちざいすぐれたる兒子こどもの事か。いやいやこんなものではない。まだこれ等よりも一層尊たうとい一つの宝がござる。それがすなわち自由の権と申すものじゃ。

これって、物売りの口上だよ。今でいうならテレフォンショッピング。今日ご紹介する商品は入れ歯洗浄剤「頑張れおじいちゃん」です。お支払い方法はとっても簡単！ ようするに、

植木枝盛は西洋にすぐいい概念を見つけて、それを何とかして当時の日本人々に売り込もうとした。この概念が最も役立つはずの市井しせいの人々に直接にだ。そこで、こういう口調になる。

明治期の思想家は、概念を輸入して売りつける商社みたいなものだ。西周あまねという哲学者は、ずいぶんいろいろな概念を輸入、つまり翻訳してくれた。物質、実験、真理、方法、数学、理性。おかげさまで、われわれは母語の日本語でこういう抽象的で難しいことが考えられるようになった。⁽⁵⁾

よき概念のリレーが途切れるようになる

ここで、次のように想像してみてほしい。人権概念を基礎づける思想的苦闘をロックたちが放棄していたらどうなっていたか。あるいは、先人からそのアイデアを学び、次の世代に伝えるリレーがどこかで途切れていたら、キミのそれなりに幸福な生存は可能だったかどうか。人権概念がとどいていないところでは、キミは誰かの所有物として売り飛ばされ、一生自由は与えられず、ときには気まぐれな暴力の餌食になる。ただ「生意気だ」というだけの理由で。そして、それに抵抗する術をもたない。しかも恐ろしいことに、それが間違ったことだと思っことすらできない。

ビリー・ホリデイという米国の黒人歌手がレパトリーレパトリーにしていた歌に「奇妙な果実 (Strange Fruit)」がある。だいたいこんな歌詞だ。「南部の木は変わった実をつける。葉には血が、根っこにも血を滴らせて。南部の風に揺れている黒い屍体。ポプラの木にぶら下がっている奇

妙な果実」。

キミの推測どおり、奇妙な果実というのは、白人至上主義者にリンチされ木から吊るされた黒人の屍体のことだ。作曲されたのは1930年、ホリデイが歌って流行らせたのは1939年。つい最近ではないか。この歌みたいなのがちょっと前まではあたりまえのようにあったし、いまも世界のあちこちで起きている。概念のリレーが途絶えるということは、抵抗するための貴重な武器が失われるということでもある。キミを生かしているのは科学技術の成果だけではない。よき概念もヒトの幸福な生存に不可欠なのだ。

生まれながらにして人権をもっているなんて虚構だと言う半可通がいる。何を言つとるのやら。あたりまえじゃないか。人権概念は発明品つまり人工物なのだから。人は心臓をもっているように人権をもつわけではない。もつと考える人々がいる限りにおいて、もつことができる。たしかにフィクションだが、われわれの生存に役立つ貴重なフィクションである。だから、この概念に磨きをかけて、ときには修正しながら、ときにはそれを骨抜きにしようとする者たちと闘いながら、次世代に手渡していくことが大切なんだ。

「よい遺伝子」を残すよりも大事なこと

以上のことをまるでわかっている人々の例を挙げておこう。2001年に当時の東京都知事がこんなことを言って物議を醸した。

「これは僕がいつてるんじゃないかって、松井孝典がいつてるんだけど、文明がもたらしたことも悪しき有害なものはババアなんだそう。女性が生殖能力を失っても生きていてるのは無駄で罪です。男は80、90歳でも生殖能力があるけれど、女は閉経してしまつたら子供を生む能力はない。そんな人間が、きんさん、ぎんさんの年まで生きてるつてのは、地球にとって非常に悪しき弊害だつて……。」（『週刊女性』2001年11月6日号）

もうキミにはどこが間違いかわかるはず。「子どもを産んだら生物学的には無用」どころか、ヒトのような文化伝達に依存する生物にとって、継承の担い手である老人の存在はきわめて重要だ。

それにしても責任転嫁された松井さん（地球惑星科学者）は気の毒だね。松井さんが言及していたのは「おばあさん仮説」という進化学上の仮説である。他の哺乳類の雌は死ぬまで生殖能力を失わないのに、ヒトの雌は閉経後も生き続ける。これを適応として説明しようとする理論だ。おばあさんが子や孫の手伝いをする事で「包括適応度」を高めているのではないか、という話⁶。これを松井さんはさらにアレンジして、ヒトの雌が生殖年齢を超えて生存すること、で集団の記憶装置としての役割を果たし、文明の誕生が可能になったのではないかと推測した。**おばあさんは文明の母**。おいおい、まるで逆じゃん。

で、こういう輩（元知事のほう。念のため）に限って、「遺伝子」とか「DNA」って言うたがるから困つたもんだ。ある中国人が凶悪な犯罪を行ったという事件にふれて、「こうした

民族的DNAを表示するような犯罪が蔓延することでやがて日本社会全体の資質が変えられていく恐れが無しとはしまい」と述べていた。⁽⁷⁾冗談じゃない。劣悪な遺伝子なんてあるもんか。ユダヤ人は劣悪な遺伝子を撒き散らすから皆殺しにしよう。こう言ってホロコーストが行われたことを忘れちゃダメだ。

でも、劣悪な「文化遺伝子」はある。知事のこうした発言を受けて、ネット上には「都知事は外国人は犯罪者だと言ったそうだ。おまえも犯罪者だ。この国から早く出ていけ。帰るのがいやなら死ね」みたいな言説が溢れた。こうして死にかけていた差別が見事復活し、現在のヘイトスピーチにつながっていく。

できるだけよい概念、よい理念、よいアイデアを生み出し、改良し、次の世代に伝えることとは、「よいDNA」を残すこと以上に、文化遺伝子に依存して生き延びていくヒトという種にとって重要だ。そして、大学は、人類が生み出してきた世代間情報伝達装置のうちでもかなり重要なものの一つである。人類の知的遺産を保存し次世代に伝えるだけなら、図書館もあるデータベースもある。しかし、大学はそれだけではなく、人類の知的遺産に対する尊敬をもち、それを継承するリレーに自ら加わろうとする人々そのものを再生産する。だから「かなり重要」なのだ。

というわけで、本章の冒頭に掲げた問いに対する答えは出た。キミが大学に行くことの人類にとっての意味は、キミにこうした**知的遺産の継承の担い手（リレー走者）**になってもらうことだ。このような人々がいないと、人類の幸福な生存は難しくなる。たくさんは無理かもしれ

ないが、一定の人数はぜったいに必要だ。キミが学ぶことは人類に必要とされている。

どう、なりたいと思ってくれたかな。なりたいと思ったキミは、それだけです。「ごく少数の幸福な」若者なのである。

教養イコール「知識プラスアルファ」の
アルファって何じゃ、と考えてみる

教養は知識を超えたものであるらしい、とみんなわかっている

幅広く豊かな知識は教養に不可欠だ、そして知識は人生を楽しくする、という話をしてきた。でも一方で、単に知識をたんまりもっているだけでは教養には足りない。私だけがそう思っているんじゃない。講義の中で、1年生にアンケートをとって見たことがある。「教養のあるひと」というのはどんなひとでしょう、という問いに、自由に答えを書いてもらった。その回答をまとめて整理すると、こんな具合になった。総数は約80名。重複あり。

豊富な知識・学識をもつ

常識・モラル・礼儀をわきまえて判断できる

場をわきまえた判断・振る舞いができる

43

40

16

幅広い関心をもち多様な視点でものを考えられる 15

知識を行動・問題解決に応用できる

9

知識は教養の重要な条件だとしつつも、それ以外の要件をあげている。おっ、こやつら、なかなかいい線いってるじゃん、と思ったのだった。「単なるトリビア的知識ではない」とわざわざ書いてくれた学生もいた。そのとおり。では、**教養とトリビアを隔てるものは何だろう。**この問いを考えよう。その際のヒントは二つだ。われわれが漠然と抱えている教養のイメージ、そして古今のエライ人たちが教養について語ってきたことから（つまり教養論）。これらをまとめあげる形で教養にできるかぎり明晰な定義を与えることを目指そう。

と書いてつまた映画の話に脱線するのを許して！

ローランド・エメリッヒをご存知か。地球製のフロップディスクが異星人のコンピュータのドライブにきっちり収まるシーンで失笑を買った『インデペンデンス・デイ』、評判最悪だったハリウッド版『ゴジラ』、「マヤ暦の予言」ブームに便乗した『2012』と、目も眩むような珍作・愚作を矢継ぎ早に生み出す、私の大好きな監督だ。そのエメリッヒが2004年に製作・公開した映画に『デイ・アフター・トゥモロー』がある。こんなあらずじ。

地球温暖化による海流の変化が逆に氷河期を引き起こす可能性に、気象学者のジャック・ホールは警鐘を鳴らし続けていた。しかし誰からも相手にされない。ところが、ある日全世界を

異常気象が襲う。東京は巨大な雹^{ひょう}、ロサンゼルスは竜巻、ニューヨークは豪雨と高潮に見舞われる。折悪しく、ジャックの息子サムは高校生クイズ大会に参加するためにニューヨークに来ていた。マンハッタンを突如襲った高潮から逃れるため、サムは友だちと一緒に公立図書館に避難する。ホツとしたのも束の間、雨が止むと今度は気温が急降下し始めた。ジャックの予測通り地球は氷河期に突入し始めたのだ。電話で助言を求めたサムに、ジャックは図書館から一歩も出るなど言い渡し、ワシントンDCから息子たちの救出に向かう……。

原題は The day after tomorrow、つまり「あさって」だ。環境破壊し放題でも、明日は大丈夫かもしれない。しかし、あさってはわからんぞ……、というメッセージが込められている。明日とあさっての間にわれわれの想像力の限界が横たわっている。

とにかく見どころてんこ盛りの映画なんだ、これが。異常気象を描いたCGの迫力、人類の愚行への告発、政治と科学の対立、高校生の友情と成長、学者たちの気高い自己犠牲、父と息子の反目と和解……ゲップが出ますな。どれもイマイチだけど、これだけいろいろあればどれかはお気に召すでしょう、みたいな映画だ。おせっかいだが、その見どころにもう一つ付け加えよう。この映画は一種の教養論としても観ることができる。

話の都合上、サムとジャックが離れ離れになる必要があるわけだが、なぜそれがよりよつて「クイズ大会」なの？ サムをNYに行かせるだけなら、もっとメジャーな行事でもよさそうなものだ。バスケットボール大会とかブラスバンド大会とか。そして、なぜ図書館に逃げ込むのか。近くにグラランドセントラルステーションもあるし、金ピカで悪趣味なトランプタワー

だつてあるぞ。

「映画には偶然はない」説をとるなら、クイズ大会と図書館という設定も、考え抜かれて選ばれているはずだ。サムと同級生たちはクイズ部の部員である。だから知識はやたらとある。何せ「ピサロに殺されたインカ帝国の皇帝は？」みたいな問題に「アタワルパ」（知らなかったらう。私もだ）とビシッと正解できるような連中だ。彼らは教養の必要条件である「幅広い豊かな知識」を満たしている。しかし、**サムたちはまだ教養人ではない。**

教養人代表としての「おじさん」

何が欠けているのだろうか。それを考えるヒントは「おじさん」との対比にある。おじさんは端役である。トータルで1分くらいしか登場しない。役名もさだかではないので「おじさん」と呼んでおく。でも、すごく重要なセリフを言う。サムはジャックの助言どおり、図書館にとどまって救助を待とうと提案するが、大多数の人たちは、逃げるならいまのうちとばかり吹雪の中に出て行ってしまふ（そして案の定、全員死ぬ）。このとき、サムの言葉に耳を傾けて図書館に残るわずかな人々の一人が、このおじさんなのである。

おじさんがフイーチャーされる第一のシーン。図書館組は凍死を避けるために本を燃やすことにする。おじさんは図書館の常連で相当の本好きのようだ。図書館に残ったのは、どうせ死ぬなら本と一緒に、と思ったからかも。当然、燃やすなんてとんでもないと反対するが、じゃあ凍え死ぬ？ というサムの問いかけに、ためらいながらも燃やすことに同意する。で、本を

暖炉に運ぶことになるわけだが……。ここで、おじさんと若い女性（この人も名前がないので、「おねえさん」と呼んどこう）との会話が挿入される。

おじ…（おねえさんが手に取った本を目ざとく見つけて）フリードリッヒ・ニーチェ？

ニーチェを燃やすなんてとんでもない。19世紀でいちばん重要な思想家だぞ。

おね…カンベンしてよ。ニーチェなんて、妹に恋した差別主義者（シヨルヴィニスト）のブタじゃないの。

おじ…差別主義者のブタなんかであるものか。

おね…でも妹に惚れてたつてのは本当でしょ。

おねえさん、（きつが）気風がいいねえ。こちらも相当な読書好きで、しかもフェミニニストのご様子で、このシーンのちよつと後に、おじさんの第二の番がやってくる。本がパチパチ燃えている暖炉のそばで、人々がうたた寝をしている。おじさんは一冊の大きな本をしっかりと抱え込んでいる。

おね…それ何？

おじ…グーテンベルク聖書。稀観書（きこうしよ）の部屋にあった。

おね…神様が救ってくれるとでも？

おじ…いや。私は神を信じてはいない。

おね…それにしちゃ、ずいぶんしつかりしがみついているじゃない。

おじ…私はね、これを守っているんだよ。この聖書は初めての印刷された書物だ。だからこれは、理性の時代の夜明けを象徴している。私に言わせれば、書き言葉は人類の最も偉大な発明だからね。笑ったっていいが、もし西洋文明が減びようとしているのなら、私はそのひとかけらを残したいんだ。

聖書に守ってもらいたくてしがみついているのではなく、**私が聖書を守っているんだ……**。カッコイイと思わない？ さて、おじさんも図書好きで知識が豊富、サムたちも物知り。「人類初の印刷された書物は何でしょう」と尋ねたら、たちどころに「ピポーン。グーテンベルク聖書！」と答えてくれるだろう。しかしおじさんは、知識を増やすことだけを自己目的化したクイズオタクではない。サムたちがまだもっていない何かをおじさんはもっている。それこそ教養の「プラスアルファ」部分だ。それは何か。

教養の〈知識を超えた部分〉を明確にしよう

第二のエピソードで自ら告白しているように、おじさんは無神論者である。しかも、キリスト教を徹底批判したニーチェがお好みのようなのだ。だけど、西洋文明が減ぼうとしているときに一冊だけ残す書物としては、ニーチェではなくグーテンベルク聖書を選んだ。これはいつたいなぜだろう。



自分の好みを、より大きな価値に照らして相対化すべし！

自分の好みで選択したのではないからだ。自分の好みを超越した「価値あるものの基準」がこの世にはある。おじさんは、好みじゃないものについても、自分を越えた価値に照らして判断できる。

というわけで、教養にはどうやら「自分をより大きな価値の尺度に照らして相対化できること」が含まれるようだ。もう少し敷衍ふえんしよう。まず逆に、自分を相対化できない、というのはどういうことを考えてみる。ようするにこれは、自分がすべての判断の基準になるといこうとだ。何事も、自分が好きか嫌いか、自分が理解できるかできないかで決める。こういう人は「生理的にダメ」とかすぐ言う。めちゃくちゃ頭の悪い表現だ。自分の好みが果たして正当なものかどうか、より大きな尺度に沿って吟味することができないからそうなる。でもそういう人に限って、「私は自分の判断基準をしつかり

持つている」と思い込んでいるから余計に始末が悪い。

教養ある人は違う。自分が特別だとは思っていないし、自分を越えた人類の知的遺産によって自分の幸せと生存が可能になっていると知っている。何より、**この世には自分を越えた価値の尺度があるということがわかっている**。だから、教養ある人は決してみんなも自分と同じものが好きはずだと決めてかからない。かといって逆に「人好き好きだよね」といつて判断停止することもない。自分の好みを自分を越えた価値に照らして評価し、好みじゃないものを選択することができると。私だって、後世にただ一本の映画を残せと言われたら、さすがにエメリツヒ作品は選ばない。好きだけど。

教養と常識

学生さんもこの辺のことはうつつすらわかっている。「多様な視点」といった要件を求めていることから、それがうかがわれる。また、「常識をわきまえて云々」という回答も、自己の相対化と関係している。なぜなら、「**常識**」というのは、**自分の好みを越えた価値尺度のうちもっとも身近なもの**だからだ。辞書を引くと、用例として「ことの善悪／道理／礼儀／場所柄」などがわきまえるべき常識として挙がっている。これらはすべて個人の好みを越えている。それをわきまえているということは、**超越的な判断基準が存在するのを知っていて、それに従って自分の振る舞いを統御できる**ということだ。

このように書いてくるとツツコミを受けそう。……ということは、教養をもつためには、な

んでも社会の慣習に従え、空気を読んでみんなと同じようにしてろ、ってこと？……そうじゃない。自分を相対化する、というのは、たんに自分の好みや欲求を、それを超えた価値に照らして吟味するという事に留まらない。自分がたまたま身につけた価値観や、自分の身の回りで「常識」として通用しているものを、さらに高次の価値に照らして批判的に吟味するということも含まれている。

デートのときは男性が女性に奢るべしという「常識」があるとすると。これに対し、ある男が、ぜったい割り勘じゃなきゃダメと主張する。お金を出したくないという自分の都合で言っているなら、そりゃただのケチだ。しかし、別の仕方での常識に挑戦することもある。両性の平等だとか、そういうもつと高次の普遍的価値に基づいて、「男が奢るといふ常識は、女性を隷属的立場において、男が女の自由を束縛していた時代の名残だからやめましょう」という選択もあるわけだ。その結果生じる振る舞いはケチ男と同じだが、中身はずいぶん違う。

というわけで、「自分をより大きな価値の尺度に照らして相対化する」というのは、たんに多数派の命じるままに生きるということではない。常識がより普遍的で高次の価値に反しないかぎりにおいて、それを尊重し自分の好みや欲求に優先させる、ということだ。

「プラスアルファ」の第二の要素

本を燃やすなんて耐えられない。私も本好きなのでその気持ちはよくわかる。人間なんていくらでもいるけど、ここにある本は一冊きり。それを燃やすくらいならみんな死のうぜ、な

どと口走ってしまいそうだ。⁽²³⁾でも、自分だけならともかく、人生半ばの若者たちにそれを強いることはできない。おじさんは、サムに言い返されてあっさり態度を変える。おじさんは自分の意見に固執しない。

これが教養の〈知識を超えた部分〉の第二の要素だ。つまり、教養は、自分を超えた価値に照らして必要とあらば自分を変えていこうとする心のゆとりを含む。こういう心のゆとりを「闊達さ^{かくだつ}」とも言う。がんらい「闊達」とは、心が大きく些事^{さじ}にこだわらないことを意味するが、ここではコミュニケーションの場面に限って用いることにしよう。つまり、闊達さとは、**相手の論が正しければ、いつでも自分の方を変えますよ**、という余裕のある態度のことだ。⁽²⁴⁾

これに関していつも思い出すのが、哲学者の鷺田清一^{きよかず}さんが指摘した、デイベート（討論）とダイアログ（対話）の区別だ。何かの講演で聞いたような気がするのだが、どの機会だったのか忘れてしまった。でも内容はよく覚えている。鷺田さんによると、両者はまったく異なるコミュニケーションのあり方だ。デイベートは、ある論題について、一方が賛成、他方が反対の立場をとって議論しあい、説得力ある論証を展開できた方が勝ちになる。デイベートでは考えを変えると負けだ。でも、ダイアログでは、**やる前と後とで自分の考えが変わらなかつたら、やった意味がない**。変われなかつたら「負け」なのである。

どっちが優れたコミュニケーションということはない。どっちもできた方がよい。でも、どんな議論をやってもデイベートになってしまう人っているんだよね。こういう人は、勝ち負けに異常にこだわる。そのため、話し合っ解決策や妥協点を見つけない。反論さ

れると、それを取り入れて自分の考えを変更することができないから（そういうことをしたら「負け」と思うらしい）、反論に反論しようとしてどんどん変なことを言い出す。こうして議論は台無しになる。ミーティングは時間のムダになる。これに対して、教養ある人は闊達な議論ができる。だから反論されることを怖がらない。むしろ、反論の中から学ぶべき点を取り出して、自分の考えを修正していきける。

以上の二つのプラスアルファ、つまり自己相対化と闊達さは、知識内容、つまり何を知っているかということではない。むしろ、「**生き方のスタンス**」あるいは「**人生への態度**」と呼んだ方がいいだろう。では、教養ある人とたんなる物知りとは、知識そのもののあり方に違いはないのだろうか。次にこの点について考えよう。

クイズ的知識と教養はどう違うか

おじさんもサムたちも、最古の印刷本がグーテンベルク聖書であるという知識をもっている。では、その知識断片の「所持のされ方」はどうだろう。違いはないだろうか。これに関連して、フランス思想研究者の内田樹（たけ）さんが面白いことを言っている。

雑学的情報は「一問一答」形式で管理されている。

「タイ・カップの生涯打率は？」「三割六分七厘」。(中略)

「雑学」とは一問一答的に設定された問いに「正解」を与える能力のことである。

しかし、「教養」はそれとは違う。「教養」のある人はトリヴィア・クイズにも強いので「雑学」者と混同されるけれど、両者はまったく別のものだ。

教養は情報ではない。

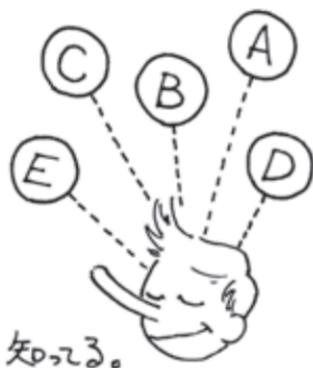
教養とはかたちのある情報単位の集積のことではなく、カテゴリーもクラスも重要度もまったく異なる情報単位のあいだの関係を発見する力である。

雑学は「すでに知っていること」を取り出すことしかできない。教養とは「まだ知らないこと」へフライングする能力のことである。(内田樹「知に働けば蔵が建つ」文春文庫)

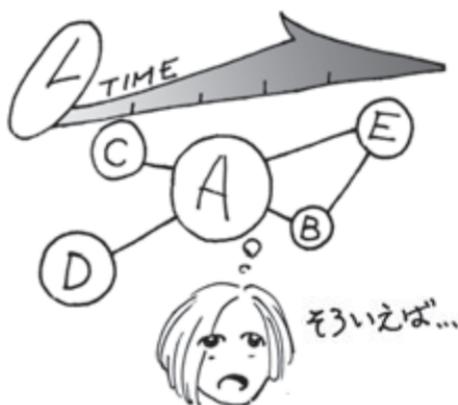
まさに、クイズ的知識(雑学的情報)と教養との違いについて語られている。内田樹という人はうまい言い回しの名人で、言い古されたことでも、彼の手にかかるとハタと膝を打つ表現が与えられる。とはいえ、膝を打ったあとでよくよく考えると、なんだか誤魔化されたような気もするわけ。……野暮を承知で私なりに言い換える。

クイズ的知識は知識断片がただ雑然と集積されているだけ。だから一問一答にしか使えない。サムたちの本の燃やし方にそれは現れている。彼らは手当たり次第に燃やそうとする。つまり、どの本(≡知識)も等価なのである。

これに対して、教養のためには、**知識が全体として構造化されていなければいけない**。まず、カテゴリーに分類され、それぞれに重要度が割り振られている必要がある。教養ある人はいろいろ知っているが、何が重要な知識で何がそれほどでもないかの判断込みで知っている。グー



知的断片の集積



知識が構造化され、巨大な座標系に位置づけられている

「クイズ的知識」と「教養」とのちがい

テンベルク聖書についての知識は、ウルトラ怪獣についての知識よりも大事だ、というようなことだね。そうすると、燃やしている本と守るべき本の違いも判断できる。

その上で、カテゴリーと重要度を飛び越えて知識と知識が結びつき、ネットワークになっていること（関係性）が必要だ。ここでは「そりゃいば」がキーワードになる。日本の電機メーカーはちよびちよび投資を繰り返し引き際を見誤って存続の危機に陥った、という記事を読んだとする。「ん？ そりゃいば、どこかで聞いた話と似ているな。そうだ、第二次大戦の日本軍の戦い方だ」。

このような類比によりカテゴリーの違う知識同士が「関係性」をもつようになる。そうすると、両者にはもつと似た点がないか、他に似た事例はないか、戦略ミスの共通原因は何か、逆に両者の決定的な違いはあるか、あるとしたら

何か等々、いくらでも「まだ知らないことがあること」を知ることができる。探求が促される。こうして、関係づけられた知識体系は、新しい知識を要求し自己増殖する。というわけで、教養には幅広く豊かな知識が必要だが、その知識が**全体としてある種の構造をもっていること**も必要なのである。

知識を大きな座標系に位置つけると

さらに、知識の全体構造という点に関してもう一つ言っておくべきことがある。おじさんは、グーテンベルク聖書を守ることを選んだ。それができたのは、自分は何をなすべきかを西洋文明の全歴史というかなり大きなスケールで考えたからだ。いま起きようとしていることは、高校生にとっては「自分たちの生命の危機」なのだが、おじさんにとっては「書き言葉の発明によって開花した西洋文明の滅亡」でもある。

ここにもう一つの教養の要件を見て取ることができる。つまり、教養には**知識が時間的にも空間的にも巨大な座標系に位置づけられていることが必要だ**。これも、内田さんがうまいこと表現してくれているので、悔しいけど引用しよう。

「教養」の深浅は、自分の「立ち位置」を知るときに、どれくらい「大きな地図帳」を想像できるかによって計測される。

「教養のない人」というのは、「自分が何者で、どこに位置しており、どこへ向かって進

んでいるか」を考えるとときに、住んでいるマンシヨンの間取り図のようなものしか思い浮かばない人のことである。「教養がある人」というのは、世界史地図のような分厚い本を思い浮かべて、そのどのあたりの時代のどのあたりの地域に「自分」を位置づけたいだろうか（中略）と考えられる人のことである。（内田樹『子どもは判ってくれない』文春文庫）

ボストン茶会事件はいつ？ という問いに、「ピポーン。1773年。異な波をよく見りゃ茶箱が浮いている、つて覚えるといいよ」つて答えられるのに、この事件がアメリカ独立に至る道の中でどういう意義をもったのかとか、それもひっくり返してアメリカの独立が大英帝国の世界支配にどういう影響をもたらしたのかとか、それらが現代の世界にどんなふうにつながっているのかとか、一方そのころ日本では、イスラム圏では、中国、アフリカでは何をやっていったのかとか、そういうことに答えられないなら、**相当おかしなことじゃないかな。**われわれがよりよく生きていくために、よりよい世の中を考えるために重要なのは、どっちの問いに答えることだろう、と考えてみてほしい。⁽²⁵⁾

こういうビッグな問いを考えることができるためには、ボストン茶会事件ができるかぎり大きな座標系に位置づけられている必要がある。というわけで、キミの座標系（脳内世界史地図）はマンシヨンの間取りサイズ？ それとももっと大きい？

宇宙ができたのは、地球ができたのは、Homo sapiens が現れたのはいつごろ？ 17世紀にどんな重大事件があった？ イスラム教が始まったのは何世紀？ 地球の直径は、太陽まで

の距離は、いちばん近い恒星までの距離はどれくらい？ シベリア鉄道でウラジオストクからモスクワまでロシアを横断するとどのくらいかかると思う？⁽²⁶⁾